

中国空軍ニュース：中国の無人機部隊の発展

漢和防務評論 20181006(抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

中国は、無人機部隊を着実に拡大しています。運用法については模索中とのことですが、無人機を多用する主な作戦は、対台湾作戦、少数民族による独立運動殲滅作戦とのことで、台湾指導者暗殺のためのピンポイント攻撃にも使用することです。中国沿海地区の空軍飛行場を無人機の予備着陸場として整備しつつあるようです。

KDR 東京特電：

種々の情報を総合すると：中国空軍は、無人機部隊を拡大しつつある。特に攻撃型無人機の予備着陸場が、東南沿海地区のいくつかの空軍基地に建設され、空軍の試験訓練基地には大型の無人機格納庫が発見された。格納庫内には一般に4乃至6機のGJ-1型無人攻撃機（輸出型はYL-1と呼称）が格納できる。無人機の訓練方式を見ると、コントロールセンターは、一般状況下では無人機を随伴せずに全国を移動している。無人機は、通常、機動展開方式で東南沿海地区、西部軍区に移動している。任務は対台湾作戦の訓練、或いは少数民族独立運動対処訓練である。

不思議なことに、GJ-1は、2010年から中国空軍に装備され、長年使用されているにもかかわらず、鼎新基地の格納庫建設状況から見るかぎり、GJ-1の装備機数は多くないようだ。装備開始から8年経過してもGJ-1を使用する作戦部隊の規模が拡大していないことから、中国は、無人機作戦の戦法については模索中であると思われる。

無人機の予備着陸場を増加させている動きから見ると、今後は無人機部隊の規模が拡大し、中国空軍が対地攻撃作戦を実施する際、無人機を多用する作戦が重要な作戦方式の一つになる可能性がある。GJ-1を装備する訓練団は元の航空兵第32師団に隷属している可能性がある。同部隊は後に訓練部隊になった。このことからGJ-1は主として訓練に用いられているようだ。

この他、当時中国空軍は、GJ-1の攻撃能力不足を仄めかしていた。彼らは搭載量のより大きい攻撃型無人機を求めていた。米国や欧州の攻撃型無人機に比べれば、GJ-1はすでに旧式である。したがって今後装備する数が増えるのはGJ-2のはずである。CH-4/5等のシリーズは、CASC集团公司の主として輸出用無人攻撃機であり、中国空軍は装備していない。

中国空軍は、過去に、大量の攻撃型無人機及び偵察型無人機を使った大規模模擬演習を何度も実施しており、無人機を使用した協同攻撃演習もすでに計画されていると思われる。現在、GJ-1型無人機の部隊は団クラスであるが、今後は無人機旅団に格上げになると思われる。

偵察型無人機の装備機数は多い。主として BZK-005 型が通州、寧波地区の岱山に配備されている。後者は、元々東海聯合作戦指揮センターに隷属し、日中間で争いのある海域に闖入した無人機は、おそらくここから発進したものと思われる。通州に配備された 005 は、直接聯合参謀部に隷属している。

信頼できる戦略情報筋によると：過去 5 年来、GJ-1 は東南沿海地区において訓練を実施してきた。これは明らかに対台湾作戦に用いるためである。

中国空軍が無人機を大量に使用することは、今後、台湾の防空に重大な脅威となろう。GJ-2 の航続距離は 4000KM に達し、航続時間は 20 時間、200KG の搭載弾量があり、複合懸架装置を使用すると、12 発の各種爆弾、ミサイルを搭載できる。また 2 発の 100KG 誘導爆弾及びミサイルを搭載できる。GJ-2 無人機により同時多数機攻撃を行う場合、搭載量 2 トンの旧式対地攻撃機 Q-5 は不要となる。無人機は、台湾の指導者を狙ったピンポイント攻撃にも使用することができる。

以上